



ドイツリーグ・ブンデスリーガ
ユナイテッド・パレーズ・ラインマインへ
大竹 志青さん(商4)

イタリアバレーボールリーグ
セリエAラティーナへ
石川 祐希さん(法4)

2017.09.26 中央大学多摩キャンパス Cスクエア小ホール

おおたけ いっせい / 1995年12月生まれ 身長202cm 最高到達点343cm ポジションOP / 出身校:東京都東亜学園高等学校。3年時には、イタリアセリエA2所属トウスカニアへ1か月間練習生として参加。2015年全日本代表メンバーに初招集された。

いしかわ ゆうき / 1995年12月生まれ 身長192cm 最高到達点345cm ポジションWS / 出身校:愛知県星城高等学校。中央大学バレーボール部で主将を務める。2014年最年少で全日本(男子バレーボール)入りを果たす。

2020年。東京で輝くために！

そのために海外で経験を積みます。

バレーボール部石川祐希(法4)は、多摩キャンパスCスクエア小ホール(9月26日)で行われた記者会見でイタリアバレーボールリーグのセリエA所属「ラティーナ」へ再び参戦することを発表した。昨年は全日本インカレ終了後にイタリアへ渡った。3度目の海外挑戦となる今回の大きな目的は「フルシーズン試合に参加すること」であった。ただし、10月1日にイタリア・ラツィオ州のラティーナへ向かうことは決まっているが、9月に開催されたワールドグランドチャンピオンズカップ2017の試合中に負傷した膝の影響で、10月11日の開幕戦の出場は見送り、現地で行ハビリを行う予定。その後、11月27日から開催される全日本インカレに出場するために一時帰国する予定となっている。

石川選手は冷静に「向こうに渡って、最初からプレーはできないが、まずはしっかりけがを治して、迷惑をかけた分、今まで以上に頑張らばいいと思っています。結果を出せればいいな」と語り「中央大学に入学したから、3度も海外挑戦ができたと思っています。大学、先生方などたくさんの方の理解をいただいていることについて、感謝の気持ちだけは絶対に忘れずにいたい。自分が頑張ることが恩返しだと思うので、思いっきりバレーボールで活躍している姿を見てもらえるようにやっていきたい。」と続けた。



記者会見の出席者。左から酒井正三郎総長・学長、大竹志青選手、石川祐希選手、バレーボール部部長松永理生監督、バレーボール部部長中野目善則法学部教授。

フルシーズンの参戦は、石川選手から松永監督に要望したという。その理由について「去年はシーズン途中からの参戦で、チームになじめたのか、なじめなかったのかも分からないし、もし最初から行っていたらもっと試合に出られたんじゃないか？逆に最初から行っても同じ状況だったのか？と疑問に思った。」と話した。また、続けてイタリアへ行くことについては、「イタリア語を1年間しっかり学ぶことで、人として成長したいし、バレーボールプレーヤーとしても成長したい。」と語学の習得も意識していると述べた。

当初は石川選手の単独会見を予定していたが、会見前夜に同じくバレーボール部大竹志青(商4)のドイツリーグ1部フランクフルト(ユナイテッド・パレーズ・ラインマイン)との仮契約が済んだことを受け、大竹選手が急きょ会見に出席し、マスコミに発表をした。大竹選手はドイツに向けての抱負を「ワンシーズンですけど、武者修行として頑張っていきたい」と述べた。大竹選手は卒業後は、企業人として就職することを決めている。

中央大学から世界へ

会見終了後、広報室が2選手にインタビューしました。

広報：グランドチャンピオンズカップ2017に、2人で出場した感想を教えてください。

石川：大竹の調子の良い時は自分は知っているのですが、グラチャンでは苦しんでいるな、と思いました。大竹：しっかり戦うことはできたと思うんですが、もっと出せる部分はあったんで、まあその辺は、まだまだと思いました。

広報：2人がコートに立つことは大学としても貴重な日だったんですが、「喜び」というのは？

石川：一緒に4年間やってきたチームメイトと全日本のコートに立てたのは自分としても、監督、チームメイトもうれしいことだと思いますが結果が伴わなかった。結果を2人で頑張って求めたかったですね。

大竹：やっと全日本で一緒にコートに立つことができましたけど、次に一緒に立つときには勝ちたいと思いました。

広報：中央大学の生活、4年間どうでしたか？

石川：大学に在籍しながら色んな活動ができたのは、中央大学じゃないとできなかったことだと思います。4年間、高められたと思います。

大竹：僕自身、一番充実したのは最後の4年生の時ですが、インカレで3連覇することができましたし、リーグでも勝ちましたし、色々な経験ができました。

広報：お二人の成長を互いに分析してください。

石川：大竹選手は代表を通して、この後、自分が頑張らないといけないという自覚ができたと思います。そこが変わったと思います。ポジションもミドルからオポジットをやって、色々変更しているで大変だったと思いますが、それをしっかりやり続けて、対応して成長したかな。

大竹：成長ですか？石川選手には実績があったんで。自分はそこに追いつこうとしてやってきました。石川選手はずっと、プレーに関してコーチングしてくれたんで、自分にとっては一人のコーチです。

広報：最後に2020年の東京に向けてお願いします。

石川：メダルを取るためには、ナショナルチームの活動だけではなく、いかに自分を高めるかということが大事で、そのためには海外でやっていく、やっていきたいというのが自分の思いです。2020年までのあと3年間をいかにバレーボールに徹して過ごせるかっていうことが大事ですね。

大竹：急ピッチで上げていかないといけないと思います。意識を高めてやっていかなければならないし、自分で考えてやらないと、東京でメダルっていうところには届かないと思います。世界に慣れるという部分も大事に1日1日やっていきたいです。

広報：ありがとうございました。お二人の、これからのさらなる活躍と2020年に期待します。



<入学式> 2014.4.1
<左から>石川、大竹、石川と同じ星城高等学校(愛知)から入学したバレーボール部武智洸史(法)。



<第17回アジア競技大会で銀メダル獲得> 2014.10.10
この大会で石川はシニア代表デビューを果たす。



<第67回秩父宮賜杯全日本バレーボール大学男子選手権大会(インカレ)で優勝> 2014.11.2.03
18年ぶりの優勝。決勝では日体大にストレート勝ち。大会を通じて落とされたセットは1セットのみ。石川は最優秀選手賞とサーブ賞、大竹はスパイク賞を受賞。黄金時代の幕開けとなる。



<第68回インカレ優勝祝賀会> 2016.02.10
第68回インカレ優勝祝賀会。2連覇を報告。石川はベストスコアラー賞を受賞。



<ラティーナ派遣記者会見> 2016.07.06
石川は世界の舞台へ再挑戦となる、イタリアのセリエAラティーナへの短期派遣を発表。多くの報道陣が集まった。



<第69回インカレ優勝> 2016.11.2.03
第69回インカレ優勝。3連覇。中央大学のインカレ優勝回数は15回となり大会最多。大会最終日の観客動員数は2,000名を超えた。石川はベストスコアラー賞とサーブ賞を受賞。



<表敬訪問。学長室にて> 2017.03.29
FIVBワールドリーグ2017に全日本メンバーとして出場したことを報告。<前列左から>大竹、酒井総長・学長、石川。<後列左から>木立真直商学部長、バレーボール部部長中野目法学部教授、中島康子法学部長、斎藤ハレーボール部副部長。